

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01758

研究課題名(和文) 二言語を同時習得する日系国際児の日本語作文力の発達過程の解明

研究課題名(英文) Developmental Process of Japanese Writing Skills of Japanese International Children Who Acquire Two Languages Simultaneously

研究代表者

柴山 真琴 (Shibayama, Makoto)

大妻女子大学・家政学部・教授

研究者番号：40350566

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では独日国際児と台日国際児を対象に縦断的的作文調査を行い、二言語同時習得が日本語作文力の発達に及ぼす一般的な影響と優勢言語等による固有の影響を解明した。2種類の作文(物語作文と説明作文)を語・文・談話の3レベルで分析した結果、優勢言語の違いによらず、学年と共に課題に適した語彙や表現が多様になっている、表記や文法の間違いが残るが談話力は高い、ことがわかった。他方で、説明作文における漢字・漢字語彙の使用数の差が小4で顕著になり、漢字の誤用にも固有の間違いが見られた。また、家庭での作文指導では、日本語母語話者の母親が子どもの日本語力に応じた足場かけをしながら支援していたことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、次の2点にある。第一に、日本語を複数言語の1つとして習得する児童の作文力の発達は、語彙力や構文・複文力は伸び方が緩やかであるが、限られた手持ちの語や表現を使って文種に適した談話を構成する力を伸ばしていくという、日本語モノリンガル児とは異なる道筋を辿ることを具体的に示した。第二に、語彙(漢字語彙)の多様さと漢字力や物語の構成のしかたに、児童の優勢言語や現地校の作文教育の影響が見られることを示した。これらの知見は、これまで未解明だった国際児の継承日本語作文力の発達過程に関する基礎資料となると共に、優勢言語の違いを視野に入れた作文指導の改善という実践的課題にも貢献できる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we conducted a longitudinal composition study of German/Taiwanese-Japanese international children to elucidate the general effects of simultaneous acquisition of two languages on Japanese writing ability development, as well as the specific effects of the dominant language, etc. Two types of compositions were analyzed at three levels. The results showed that regardless of the dominant language, 1) the vocabulary and expressions appropriate to the task varied with grade level, and 2) the students' discourse skills were high, although some notational and grammatical errors remained. On the other hand, 3) the difference in the number of Kanji characters and Kanji vocabulary used in expository compositions became more pronounced in the 4th grade, and 4) there were some unique errors in the misuse of Kanji characters. In addition, native Japanese-speaking mothers supported their children's writing homework at home by scaffolding their concern and Japanese ability.

研究分野：発達心理学

キーワード：日系国際児 リテラン 独日国際児 台日国際児 日本語作文力 継承語としての日本語 二言語同時習得 パイ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

平日は現地校に通い週末に日本語補習授業校(以下、補習校)で日本語を親からの継承語として学習する児童が日本語で書く力(作文力)を習得することは容易ではなく、補習校教育の重要な課題になっている。しかしながら、補習校通学児の作文力の発達過程は明らかになっていない。申請者らは、特に作文力を伸ばしにくい国際結婚家族の子ども(以下、国際児)に注目し、独日国際児への予備調査を通して、作文力の変化過程には日本語母語児には見られない固有の特徴があることを見出したが(柴山ほか,2017 等)、児童の優勢言語や現地校での作文教育の違いが日本語作文力の伸び方にどのような影響を与えるのかは未解明であった。また、家庭での支援過程については、独日国際家族の例については我々が解明してきたが(柴山ほか,2012,2014;ピアルケほか,2013 等 / H26-30 科研費研究)、台日国際家族の例については未解明であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「二言語の同時習得が国際児の日本語作文力の形成に及ぼす一般的な影響と、優勢言語や現地校の作文教育による固有の影響を具体的に解明すること」である。この目的を解明するために、以下の3つの課題を設定した。

【課題1】ドイツ語を優勢言語とする独日国際児の日本語作文力の発達過程の解明

そのために在ドイツ A 補習校(児童生徒の8割強が国際児)で、3時点(小2→小4→小6)での縦断的論文調査を実施し、作文の縦断的な分析を行う。これにより、アルファベットを表記文字とするドイツ語を優勢言語とする継承日本語学習児の作文の伸び方の特徴を分析する。

【課題2】中国語(繁体字)を優勢言語とする台日国際児の日本語作文力の発達過程の解明

そのために在台湾の複数の補習校(児童生徒の約9割が国際児)で、3時点(小2→小4→小6)での縦断的論文調査を実施し、作文の縦断的な分析を行う。これにより、漢字(繁体字)を表記文字とする中国語を優勢言語とする継承日本語学習児の作文の伸び方の特徴を分析する。中国語を優勢言語とする児童でも繁体字使用児の方が簡体字使用児よりも日本語の漢字読みの成績が高いという先行研究の知見(柳瀬,2017)から、繁体字使用児が書く日本語作文には、優勢言語が漢字表記言語であることの影響がより鮮明な形で現れると予想されたからである。

【課題3】台日国際家族における支援過程の質的な解明

そのために2家族(幼稚園から小学校中学年に移行する子どもがいる家族、小学校中学年から高学年に移行する子どもがいる家族)を対象に、行動観察調査を実施する。作文の宿題では親はどこに重点を置いて支援しているのか、台日国際児の日本語作文力の発達過程と家庭での支援過程にはどのような関係があるのかを明らかにすることを目指す。

## 3. 研究の方法

### (1)研究方法論

本研究で採用した研究方法論の特徴は、以下の2点にある。

第1点は、日本語を継承語として習得する国際児の日本語作文力の変化過程を、縦断的論文調査、補習校や家庭における国際児の相互作用や行動文脈を理解するためのフィールドワーク、親による行動観察、を組み合わせた包括的・多角的方法により解明する方法を採用したことである。

第2点は、事例研究において、国際児の継承日本語力の形成過程を<日常実践に基礎を

置く協働的・解釈的過程>として探究する質的アプローチを採用したことである。従来、子どもの個人的な認知活動と見なされがちであった言語習得を「親子の共同行為」として捉え直し、日本語実践への参加を通して国際児が変化していく様相を具体的に把捉しようとした点に、本研究の方法論的特徴がある。

## (2) 研究対象とデータ収集法・分析法

### 1) [課題 1]と[課題 2]を解明するための作文調査

○研究対象：小学生の作文力の発達においては、学校教育で行われる作文教育の影響も大きいと予想されたことから、児童期の書く力の発達過程を捉える上で重要と判断された時期(小2・小4・小6の3つの学年)の児童を対象とした。

○データ収集法・分析法：先行研究(Berman & Katzenberger, 2004)および日本の「小学校学習指導要領」「小学校国語学習指導書」の検討を踏まえ、「物語文」と「説明文」の2つのジャンルを選定した。これに対応する作文課題として「物語文課題」と「説明文課題」を独自に作成し、この2つの課題を用いて対象児に作文を書いてもらった。また、作文の分析については、筆者らが独自に開発した「総合的・多層的作文分析システム」(語・文・談話の3レベルから構成)(柴山ほか,2015;高橋ほか,投稿中)を用いて、系統的に分析した。談話レベルの分析においても、筆者らが独自に開発したルーブリック(低・中・高学年用の3種類を作成)を用いて分析した。

### 2) [課題 3]を解明するための家族の事例調査

研究対象：本研究では、先行研究の検討から示唆されたバイリテラシー形成上の重要な年齢(小学校入学を経験する6歳頃、小学校中学年に進級する8,9歳頃)に相当する子どもがいる台日国際家族を対象にした。対象家族の選定においては、子どものバイリテラシー形成に有利な条件((a)母親の中国語力が高いこと、(b)母子間で日常的に日本語を使っていること、(c)親子で定期的に読み書き活動を行っていること)の3点に該当する家族(2家族)を探した。

データ収集法：親による行動記録法として「日誌法」を採用し、研究代表者が作成した記録様式を用いて対象家族の日本人母親に定期的に観察記録を書いてもらった。母親からは毎月観察記録を提出してもらい、それに対して研究代表者と研究分担者の一人がフィードバックを行い、エピソード記録が一定の質を保てるように配慮した。

## 4. 研究成果

2020年に生じたコロナ禍の影響により、特にオンライン授業への切り替えが困難な台湾の小規模補習校では、作文調査が実施できないこともあった。そのため当初の予定よりも台湾で収集できた縦断的的作文データが少なくなった。本研究で収集したデータの一部は分析途中であるが、現時点での本研究の主要な研究成果をまとめる。

### (1) [課題 1]と[課題 2]に関する研究成果

収集できた作文の中間分析の成果、以下のことがわかってきた。

#### 1) 優勢言語の違いによらず共通に見られた特徴

現地語(優勢言語)と日本語(継承語)を同時に習得する子どもの日本語作文力の伸び方には、国際児の優勢言語の違いによらず、以下のような特徴が共通に見られた。

・両課題作文で、語彙・漢字(特に小2以上の漢字)の使用や表現の伸び方は緩やかであるが、

小4になると書き言葉や作文課題ごとに必要な構文・複文を使って談話を構成できるようになっていた。表記・文法・正書法の誤用が散見されるが、談話の評定平均値は日本で育つ日本語モノリンガル児とほぼ比肩していた。

- ・物語作文より説明作文の方が談話の評定平均値が高い。説明作文においては、独日国際児も台日国際児も、現地校で学習した環境問題に関する知識を活用して、それらを引用しながら作文を書いていた。一方、物語作文においては、幼児期の読み聞かせ等を通して馴染みのある「物語スキーマ」を土台にしつつも、中学年以降、分量的にも内容的にも話を展開するのが難しい様子が見られた。こうした状態には、日本語で物語を読む経験の少なさが関係しているのではないかと推察された。

## 2)固有に見られた特徴

他方で、漢字との接触が少ない独日国際児と漢字への馴染みがある台日国際児とでは、異なる特徴も見られた。

- ・独日国際児は物語作文において話の設定を書き、副詞節を多用して場面ごとに話を展開させるなど、現地校での作文教育の影響が窺えた。ただし、談話の評定平均値には台日国際児との差が見られなかった。
- ・説明作文における漢字・漢字語彙の使用数の差が小4で顕著になり、台日国際児の方が談話の評定平均値が高かった。台日国際児は高学年になるほど漢字語彙が豊かになり使用数も急増するが、他方で日本語の漢字の表記間違いや送り仮名の間違いが残存していた。
- ・漢字の誤用にも固有の間違い方が見られた。独日国際児は同音異字(例 / 自速[正用:時速])、台日国際児は同義異字(例 / 遊ぶ[正用:遊ぶ])や繁体字による誤用が見られた。独日国際児は読み方を手がかりにして、台日国際児は意味を手がかりにして、日本語の漢字を呼び出していることが窺えた。

## (2) [課題3]に関する研究成果

幼稚園から小学校中学年に移行する台日国際家族と小学校中学年から高学年に移行する子どもがいる台日国際家族の2家族における家庭での支援過程を分析した結果、以下のよう特徴を指摘することができる。

### 1)共通に見られた点

- ・日本語母語話者の母親が子どもの日本語実践に関わる主要な支援者であった。補習校への通学の判断や補習校の宿題の把握・支援を行うだけでなく、家庭内の日本語を使う活動を提案・編成したり日本語学習の手助けをしたりするなど、子どもの日本語実践への参加において、共同参加者かつ導き手としての役割を担っていた。これに対して、中国語母語話者の父親は、母親に依頼された時や母親が支援できない時にのみ(中国語作文の宿題など)、子どもの現地校の宿題を支援する補助的支援者として関わっていた。
- ・家庭での読み書き支援のうち特に日本語作文の支援においては、その時の子どもの関心や日本語力を見ながら、必要に応じて対話を通して日本語語彙や表現を提供・修正するなどの支援を行っていた。台日国際児の場合も、独日国際児と同様に、日本語で書く力(文字作文力)は、日本語で話せる力(口頭作文力)を土台にして形成されていくことが把握された。
- ・家庭内での日本語実践では、ITメディアが活用され、時空間を超えた日本語資源が導入

されていた。母親の積極的な導入により、日本語の書籍に限らず、日本語教材や動画教材、日本のテレビ番組など、オーディオ・ビジュアル資源も頻繁に活用されていた。

## 2) 家族によって異なる点

- ・家庭内における子どもの日本語実践への参加状況は、父親の日本語力を含む家庭内で利用可能な日本語資源の多寡によって異なっていた。父親の日本語力が高く家族全員が日本語を共通言語として使用している家族ほど、子どもが幼児期から日常的に参加する日本語実践が量的にも質的にも豊富になり、対象児の日本語の会話力や読み書き力を高めることに繋がっていた。
- ・子どもが小学校中学年までは、子どもが参加する日本語実践は母親を介して提供されていたが、中学年以降になると子どもが参加したい日本語コミュニティ(オンラインゲームやSNSのコミュニティ)に自分でアクセスして参加していた。子どもが中学年になると、それまで母子間協働で経験していたメディア利用を子どもが一人で自立的に利用できるようになること、日本のゲームを日本語でプレイすることが日本語を継承語として学ぶ同年齢の仲間との交友関係作りに繋がっていたことが確認された。

## < 引用文献 >

- Berman, R. & Katzenberger, I. (2004) Form and function in introducing narrative and expository texts: A developmental perspective. *Discourse Processes*, **38(1)**, 57-94.
- ビアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登. (2013) バイリンガル児はどのように二言語で読書をするようになるのか：読書文化の世代間における伝達過程. 質的心理学研究, 12, 24-43.
- 柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子. (2012) 独日国際児の現地校・補習校の宿題遂行過程：親子の共同行為という視点から. 異文化間教育, 36, 105-122.
- 柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登. (2014) 小学校中学年の国際児は現地校・補習校の宿題をどのように遂行しているのか：独日国際家族における二言語での読み書き力の協働的形成. 質的心理学研究, 13, 155-175.
- \* 日本質的心理学会「学会賞(優秀日誌研究論文賞)」受賞
- 柴山真琴・高橋登・池上摩希子・ビアルケ(當山)千咲. (2015) 小学生作文の評価法の開発：多様な環境のもとでの「書き言葉」の習得を支援するために. 日本発達心理学会第26回大会論文集, p.64.
- 柴山真琴・ビアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登. (2017) ドイツ居住のバイリンガル小学生の日本語作文力：日本語補習授業校通学児の2年間の縦断的調査に基づいて. 人間生活文化研究, 27, 682-696.
- 高橋登・柴山真琴・池上摩希子・ビアルケ(當山)千咲ほか. (投稿中) 小学生が身につける「書き言葉」はどのようなものなのか：異なるジャンルの作文の比較分析から.
- 柳瀬千恵美. (2017) 漢字圏で日本語を継承する子どもの漢字認識. MHB 研究会 2017 年度予稿集, 78-79.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・高橋登・池上摩希子	4. 巻 第29巻
2. 論文標題 「現地校・補習校の宿題支援における家族間の調整過程：独日国際家族の事例に基づいて」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大妻女子大学人間生活文化研究所論文集『人間生活文化研究』	6. 最初と最後の頁 236-256
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登	4. 巻 第30巻
2. 論文標題 「ドイツ居住のバイリンガル中学生の日本語作文力：日本語補習授業校通学児の4年間の縦断的調査に基づいて」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大妻女子大学人間生活文化研究所論文集『人間生活文化研究』	6. 最初と最後の頁 958-973
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ピアルケ(當山)千咲・柴山真琴・池上摩希子・高橋登	4. 巻 第19号
2. 論文標題 「複数言語環境に育つ子どもはどのように読書活動を実践してゆくのか：社会的環境とのかかわりと言語をめぐる意識の変化に注目して」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本質的心理学会誌『質的心理学研究』	6. 最初と最後の頁 105-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 柴山真琴	4. 巻 第88号
2. 論文標題 「対話と協働の中での言語習得：独日国際児の事例から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本心理学会誌『心理学ワールド』	6. 最初と最後の頁 25-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柴山真琴・ピアルケ(當山)千咲・池上摩希子・高橋登	4. 巻 第31巻
2. 論文標題 「小学校低学年の継承日本語学習児の日本語作文力：独日児と台日児の比較に基づいて」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大妻女子大学人間生活文化研究所論文集『人間生活文化研究』	6. 最初と最後の頁 325-343
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴山真琴・高橋登・池上摩希子・ピアルケ(當山)千咲	4. 巻 第32巻
2. 論文標題 「ドイツ居住のバイリンガル高校生の日本語作文力：日本語補習授業校通学児の6年間の縦断的調査に基づいて」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大妻女子大学人間生活文化研究所論文集『人間生活文化研究』	6. 最初と最後の頁 638-665
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 柴山真琴	4. 巻 第57号
2. 論文標題 「異文化間教育研究における方法論的確かさに向けて」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 異文化間教育学会誌『異文化間教育』	6. 最初と最後の頁 74-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 6件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 柴山真琴
2. 発表標題 「在ドイツ補習校児の書く力の発達過程：6年間の縦断的作文調査に基づいて」
3. 学会等名 2021年度ドイツ地区日本語補習授業校現地採用講師研修会(オンライン開催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴山真琴(代表講演)(高橋登・ピアルケ千咲・池上摩希子との共同講演)
2. 発表標題 「台日国際児の書く力の発達過程：2019年作文の横断的分析から」
3. 学会等名 台湾継承日本語ネットワーク会議2022年度年次会議 (オンライン開催) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴山真琴
2. 発表標題 「異文化間教育研究における方法論的確かさに向けて」
3. 学会等名 異文化間教育学会第43回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴山真琴
2. 発表標題 「日本語を継承語として学ぶ児童の書く力の発達過程：ドイツ語-日本語バイリンガル児の縦断的論文調査の結果から」
3. 学会等名 香港日本語教育研究会・日本語教育セミナー「多言語環境における年少者の日本語教育」講演会 (オンライン開催) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柴山真琴
2. 発表標題 「子どもの日本語の育ちを包括的に捉えるための研究法：独日国際児の事例研究から」
3. 学会等名 香港日本語教育研究会・日本語教育セミナー「多言語環境における年少者の日本語教育」ワークショップ (オンライン開催) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年



1. 発表者名 柴山真琴(代表講演)(高橋登・ピアルケ千咲・池上摩希子との共同講演)
2. 発表標題 「台湾居住の継承日本語学習児の書く力：2019・2021年作文課題の分析から」
3. 学会等名 台湾継承日本語ネットワーク会議2023年度年次会議 (オンライン開催) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柴山真琴
2. 発表標題 「エスノグラフィー入門：日常の言語実践の研究法として」
3. 学会等名 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2023年次大会ワークショップ (オンライン開催) (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 柴山真琴・ピアルケ千咲・池上摩希子
2. 発表標題 「継承日本語作文力の発達過程：独日国際児の事例に基づいて」
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会・大会委員会企画シンポジウム「拡大するリテラシー：多様化する日本語環境のもとでの読み書きの獲得と支援」
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 292
3. 書名 『質的研究法マッピング』(柴山真琴が3章5節「マイクロエスノグラフィー」を分担執筆)	

1. 著者名 異文化間教育学会(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 288
3. 書名 異文化間教育事典(柴山真琴が「エスノグラフィー」「仮説検証型・仮説生成型」を分担執筆)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>大妻女子大学人間生活文化研究所『人間生活文化研究』No.29(2019) 投稿論文目次  <a href="http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2019.html">http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2019.html</a>  大妻女子大学人間生活文化研究所『人間生活文化研究』No.30(2020) 投稿論文目次  <a href="http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2020.html">http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2020.html</a>  大妻女子大学人間生活文化研究所『人間生活文化研究』No.31(2021) 投稿論文目次  <a href="http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2021.html">http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2021.html</a>  大妻女子大学人間生活文化研究所『人間生活文化研究』No.32(2022) 投稿論文目次  <a href="http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2022.html">http://journal.otsuma.ac.jp/ctrb2022.html</a>  日本質の心理学会誌『質の心理学研究』第19号  <a href="https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaqp/19/0/_contents/-char/ja">https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaqp/19/0/_contents/-char/ja</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高橋 登 (Takahashi Noboru) (00188038)	大阪教育大学・教育学部・教授  (14403)	
研究分担者	ビアルケ 千咲 (Bialke Chisaki) (70407188)	大妻女子大学・人間生活文化研究所・研究員  (32604)	
研究分担者	池上 摩希子 (Ikegami Makiko) (80409721)	早稲田大学・国際学院(日本語教育研究科)・教授  (32689)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	菅銘 美菜  (Tome Mina)	目白大学・人間学部・助教  (32414)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関